

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジョージ・カックル

イラストレーション=花井祐介

第24回

ウォーレン・ジヴォン 「カルメリータ」

メキシコが匂うジャンキーな男の物語



Warren Zevon
"Warren Zevon"
Asylum 07E1060 [1976]
→アサイラム @WQCP1024

1スしたものの。この2枚目のアルバムで、彼の名前は世に知られることになった。プロデューサーは、作詞・作曲もやるウォーレンのファン・ジャクソン・ブラウン。ウォーレンは、この時にはもう次のアルバム制作に入っていて、すでに後の大ヒット曲「ロンドンの狼男 (Werewolves Of London)」もあったが、ジャクソンはリスナーにはかの曲も大事に聴いてもらいたいと、故意にこの曲を入れなかったらしい。(78年の3枚目『エキサイター・ボーイ』に収録)。ちなみに、リンダ・ロンシュタットが取り上げ自身のアルバム(76年の発売直後にプラチナ・アルバム認定の大ヒット)の表題曲にした「風にさらわれた恋 (Hasten Down The Wind)」も、『ワタシ』に収録されている。

ウォーレンはジャクソンと同じく、ザザン・カリフォルニアとその周辺にあった風景を曲にしていた。だが、皮肉に満ちた曲を多く書いていたところがジャクソンとの違いだった。例えばリンダ・ロンシュタットもカヴァーした「私はついてない (Poor Pitiful Me)」では、恋人にふられた人が線路の上に頭を乗せて列車が来るのを

カリフォルニアに何年も住んでいたが、フランス語を使えるところはどこにもなかった。けどスペイン語ならアメリカの色んなところで使える。しかもスペイン語の女性の名前にはロマンがある。セレーナ、マルガリータ、カルメリータ……、響きもいい。今回紹介する「カルメリータ」が入っているアルバム『ワタシ』(Warren Zevon)は、彼が1976年にアサイラムからリリ

アメリカの中学校では、フランス語かスペイン語を習わなくてはいけない。俺は当時悩んだ末、フランス語にしたが、今でも後悔している。大人になってわかったけど、フランス人はアメリカ人が話すフランス語なんて聞きたくないんだ。フランス語を選んだ理由は一つ、フランス語の先生が『ブレイボーイ』のカレンダーに載りそうなのがどグラマーな女性だったからだ。でも俺は待つ詩があるし(しかもここにはもう実際に列車は走らないのに)、また「命知らず (Desperados Under The Eaves)」では、カリフォルニアが地震で海に滑り込んでこのホテルはきつと俺がつけを払うまでは建っているだろう、なんて歌ったりしている。

曲名の「カルメリータ」は、先にも書いたようにスペインではよくある女性の名前だが、ウォーレンもよく使っていたであろう通りの名前でもある。カルメリータ通るとは、ビヴァリーヒルズの抜け道の名前だ。とはいえ、きれいなメキシコ人女性を想像させるこの曲は、そんな彼女と別れてしまったジャンキーな男の話だ。

I hear Mariachi static on my radio
And the tubes they glow in the dark

始まりからメキシコの匂いがする詩だ。ラジオからは雑音混じりのマリアッチが聞こえてくる。マリアッチはメキシコを代表する民俗色豊かな音楽スタイル。LAにはメキシコ人がたくさんいるから、昔からスペイン語のラジオがある。しかし今と

違って、この曲が書かれた70年代では、まだスペイン語のラジオは弱い電波のコミュニティ・ラジオだったので、雑音が多かった。そしてそのメキシコ人相手のラジオでは、普通のラジオ局では流れないマリアッチやコンフントによる音楽が流れていた。真実管が暗闇の中でぼんやりと光っている。

And I'm there with her in Ensenada
And I'm here in Echo Park

そして俺は彼女とエンセナーダにいる。そして俺はここ、エコパークにもいる。エンセナーダはカリフォルニアとの国境から車で2時間ぐらいの、メキシコのバハ・カリフォルニア半島にある街だ。昔からカリフォルニアの若者たちはこの街まで行き酒を飲んで遊んでいた。カリフォルニアでは21歳にならないと飲酒はできないが、メキシコでは18歳から酒を飲むことができる。ちなみにエンセナーダで1892年に創業したフリングス・キャンティーナという店では、1941年にあのテキーラ・ベースのカクテル・マルガリータが生まれたと言われている。特に50年代のサーファーや若

者には有名な店だ。

しかし、そのエンセナーダに彼女がいる」というのは、彼の頭の中だけでの話だ。実際の彼自身はエコ・パークにいる。エコ・パークはLAの北側の丘の上にあるエリア。昔、映画会社がハリウッドに引越す前に、軒を連ねていた。第二次世界大戦の前は政治的ラジカルが住んでいた。レッド・ヒルとも呼ばれていた。今でもアーティストがたくさん住み、さまざまな人種がいるエリアだ。

(chorus)
Carnelita, hold me tighter
I think I'm sinking down
And I'm all strung out on Heroin
On the outskirts of town

ここからはサビだ。カルメリータ、俺のことをきつく抱きしめてくれ。俺はどんどん落ち込んでいつている。俺はこの街外れで、ヘロイン漬けになっている。'strung out'とは中毒になっていること。'outskirts of town'とは街の外れのこと。スカートみたいにセン

ターから外に広がっていく感じ。エコ・パークは、L Aの中心からちょっと離れているところだからだ。

I'm sitting here playing solitaire
 With my pearl handed deck
 The county won't give me no more
 methadone
 And they cut off your welfare check

俺はここに座って真珠のハンドルのデッキでソリティアをしている。solitaireは主に一人で遊ぶカードゲーム。'pearl handed deck'とは、ピストルのことだ。リヴォルヴァーの銃把には、真珠貝で裝飾されているものもある。ここでウォーレンは、ピストルとトランプのdeckをひっかけている。ピストルでソリティアをする。ロシアン・ルーレットをしていくということだ。リヴォルヴァーに一発だけ実弾を入れて弾倉を回し、頭に当てて引き金を引く残酷なゲーム。自殺しようかと悩んでいるジャンキーがすることだ。

郡はもう俺にはメタドンをくれない。'county'とは州の次に位置する行政区画で、



この場合、L Aがある郡のことだ。その郡はヘロイン中毒の人たちにメタドンという合法ドラッグを配る。それを使えば、少しずつヘロイン中毒から抜けられるはずなんだ。その上、福祉小切手も外されてしまった。'welfare check'とは失業者に国が払う生活保護のこと。国から送られた小切手を、銀行で現金に換えてもらう。彼女はもうそばにいないというから、きつと家に届いていた小切手は、彼が勝手に現金にしていたんだろう。

(chorus)
 Carnelita, hold me tighter
 I think I'm sinking down
 And I'm all strung out on Heroin
 On the outskirts of town
 Well I pawned my Smith Corona
 And I went to meet my man
 He hangs out down on Alvarado
 Street
 By the Pioneer chicken stand

俺はタイプライターを質屋に出してし

まった。'Smith Corona'はタイプライターのメーカーの名前。例えばティッシュを'クリネックス'と呼んでしまうように、一番人気のあったタイプライターで、誰でも知っている銘柄だ。当時の若者にとっちはいけばん値の張った、いわば宝物。そのタイプライターを金に替えて、俺の男に会いに行くって歌っている。この'my man'とは、ドラッグ・ディーラーのこと。'man'という言葉にはディーラーという意味もあるが、警察を指すこともある。

よくロックの歌詞や小説に出てくる言葉で、例えばヴェルヴェット・アンダーグラウンドの67年のファースト・アルバムに収録された「僕は待ち人 (I'm Waiting For 'The Man)」の'man'も、ドラッグ・ディーラーのこと。この曲は、20ドルを手にしてドラッグ・ディーラーを待っている話だ。だが、グレアム・ナッシュの74年の『ワイルド・テイムズ』収録の「プリズン・ソング」での'man'は、警察のことを指す。いろんな意味で、大切な人のことを指すんだ、この'man'は。

歌詞に戻ろう。その男はアルヴァラード・ストリートのパイオニア・チキン・ス

タンドのそばにいる。'hang out'とは、そこによくいるという意味。アルヴァラード・ストリートは、L Aに実際にある、北から南に走る道なんだ。ディーラーに会いに行くところは、パイオニア・チキンのスタンドだ。このファーストフード店は61年にエコ・パークで設立されたファーストフードのチェーン店。今ではポパイ・チキンに買収されてL Aにはもう3店舗しか残っていないけど、昔はたくさんあったんだ。サセット通りとエコ・パーク通りの角にあった店に、よくウォーレンは打ち合わせや食事をして行っていたようだ。そこは24時間営業で、バイカー、フッカーやドラッグ・ディーラーたちが集まる場所だった。街の危ない人たちが集まる、柄が悪いところだった。

(chorus)
 Carnelita, hold me
 tighter
 I think I'm sinking
 down
 And I'm all strung out
 on Heroin



ジョージ・カックル /
 GEORGE COCKLE
 ラジオ・パーソナリティ。
 1956年、鎌倉生まれ。
 18歳で新宿2丁目のロッ
 ク・バー<開拓地>で、
 音楽の世界にのめり込
 む。ハワイアンなどの
 CDをプロデュースする傍
 ら、インターFMでは音楽
 番組「レイジーサンデー」
 のパーソナリティをつと
 め、音楽通ぶりを披露。
 さらにサーフ・イベントな
 どのMCでも活躍。
 http://whatsupmusic
 inc.com

俺もいつかまたL Aに行ったら、このエコ・パークのエリアを見にきたい。エンセナーダでマルガリタを飲みたい。俺はスペイン語を勉強しなかったことを後悔している。'カルメリータ'のような女性にも出会えなかったしね。

On the outskirts of town

ウォーレン・ジヴォンは2003年に癌で亡くなってしまった。でも彼のファンには、ジャクソン・ブラウンをはじめ、ブルース・スプリングス・ステイーンやニール・ヤングといった大物が名を連ねる。また、グレイトフル・デッドやボブ・ディランなどは彼の曲をカバーしているほどだ。彼が亡くなっても、こんなすばらしいソングライターたちが、彼の曲を受け継いでいる。こうやって、日本のマガジンに日本語で彼のことを紹介しているファンもいるしね(笑)。